

CONSERVATION VOLUNTEERS **2**

Vol. **2**

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）

巻頭言 **景観の変遷と日本の風景の保全** p1

連載 **実践的な環境保全活動の人材育成** p3
ボランティア、ケガと弁当は自分持ち? p4
環境保全ボランティア活動と若者の自立支援 p4
人材は「育成」か「成育」か? p5

報告 **リーダーミーティング『パートナーシップで自然歩道を守る』開催報告** p6

お知らせ **イベント情報、事務局だよりほか** p12

巻頭言「景観の変遷と日本の風景の保全」

重松 敏則 (JCVN 理事長)

景観は時代とともに変遷します。大きくみれば、例えば恐竜時代、氷河期、温暖になった縄文海進の時代、そして間氷期にあると言われる現代では、植生も景観も全く異なるのは言うまでもありません。しかし、こんな見方をすると地球温暖化も大した問題ではないような無責任な意見に取り込まれそうです。

そこで、時間の尺度を人類が文明を発達させた数千年前から見ることにすると、人間による火入れや放牧、開墾による森林破壊が自然景観を消失させる一方、放牧地や田園農地、集落や都市などの文化的景観を生み出してきています。しかし、世界史上では4大文明が滅んだように、都市の拡大と維持のために森林の過剰な破壊・収奪が行われた結果として、砂漠化が進んだことも見逃せません。また、文明や人種、宗教の衝突による戦乱

によって、幾多の集落や都市が廃墟となってもきました。

日本の「里山・里地・里海」の景観は、縄文・弥生時代になって、従来からの漁労・採集生活に加え、定住による農耕生活が始まったことで生み出されます。薪炭材を得るための森林の伐採萌芽更新や、開墾による水田の構築と、耕作に必要な有機肥料としての薪炭林での下草刈りや落ち葉掻きなどの生活と生産のための営為が、自然を馴化させた二次的自然と景観を形成し、そこを拠り所とする動植物も共存するようになったのです。

自然資源を循環利用する持続的な生活システムが、その規模と人口を拡大しつつ、飛鳥時代、奈良時代、平安時代へと、大陸文化とも交流しながら、和歌や絵画、技術工芸などの日本文化を発展させていったのですが、その時代の過程でも戦

乱や自然の過剰利用による景観や環境の荒廃が、都の周辺や資源の調達先で生じています。

しかし、国土が最も荒廃したのは戦国時代でしょう。諸国の豪族が農民も兵に駆り出して、都市や集落を焼き討ちし、再建に森林を伐り出し、また、破壊し再建と、森林からの多大な収奪が無法状態のなかで繰り返されたのですから、まさに戦争は最大の破壊と消費です。



こうして日本列島でも、屋久島や北海道などは別にして、江戸時代以前は森林の過剰利用によるハゲ山化とそれに伴う洪水の多発が深刻だったようです。江戸時代になってトメ山制度や、打ち首・手足切断のような厳しい刑罰の伐採禁止令、それに植林の奨励により、日本は再び緑豊かな森の国になったのです。白砂青松の美しい浜辺のクロマツ林も、潮風や飛砂を防止して後背の農地を守るため、その多くが江戸時代に大きな苦難のもとで造林されたものと言われます。

人力や牛馬を使った湿地や干潟の干拓による新田開発なども行われましたが、それらは現代からみれば小規模で、自然の許容力の範囲内であったことから、湧き出るような里海、里川、里湖等の幸に大きな影響を及ぼすこともありませんでした。

幕末や明治維新に来日した外国人達は、口々に国際的にも秀逸なものとして日本の美しい里山・里地・里海の風景を絶賛し、また勤勉で礼儀正しく、ゴミ一つない清潔な、資源循環型の生活のありように驚嘆したのでした。工業化も進みましたが、絶対多数の日本人が里山や里地、里海で暮らしをたて、そのような生活と風景は第2次大戦後の高度経済成長期に入る昭和30年前後まで、綿々と続いたのでした。そして、敗戦後に進駐軍

として来日した多くのアメリカ人や西欧等からの旅行家も、日本の風景の美しさに感嘆するとともに、それが過疎や燃料革命、機械化、公共事業によるコンクリート化などによって、どんどん、あるいは劇的に貧化し、変貌していくことを実に残念に思い、保全すべきと警鐘を鳴らしてくれています。私たち日本人の中にも少なからぬ人々が同じ思いをいだき、実践的な保全活動を進めてもいるのですが、大方の人々が景観の変貌に無頓着な実状です。

観光ポスターや写真展では、里山・里地の棚田の風景や歴史的な街並みが採用され、国内外に対する「美しい日本」のキャッチコピーとしてもしきりに使われています。しかし、花鳥風月を愛でることもできなくなった密生した里山、過疎と経営難で耕作放棄されヤブ化していく棚田、間伐不行き届きで密生・裸地化する拡大造林されたスギ・ヒノキ林、そして大規模な浅海・干潟の埋め立てや堰き止めによる藻場の消失と自然の循環の切断による海や川、湖などの自然の幸の枯渇の実状は深刻です。

多くの世代の原風景がもはや「里山・里地・里海」では無くなりつつある時、時代とともに暮らしや景観は変化するものだと突き放すのではなく、世界に誇れる歴史文化と日本人としてのアイデンティティを守り、継承するために、是非とも保全・再生したいものです。JCVNは、再生可能な森林のバイオマス資源の持続的利用、そして生物の多様性保全をも視野に、若者が未来に希望をもてる国民総参加の保全・社会活動の一翼を担いたいと考えています。



連載

JCVN理事による経験とノウハウの詰まった連載コラム！

■実践的な環境保全活動の人材育成（２） ～大学での導入教育～

朝廣 和夫（JCVN 副代表・九州大学芸術工学研究院）

前は、「手入れを行う人」に重きをおいたBTCVの人材育成について紹介しました。「人材育成といえば」、学校教育機関が1つの要であります。本稿では、筆者の在籍する学校の取り組みを事例とし、現代におけるこのような活動が必要とされている事由について述べたいと思います。

21世紀の人材育成に関する提起として、文部科学省中央教育審議会が平成20年12月に「学士課程教育の構築に向けて」を答申しています¹⁾。グローバル化、少子化の中で学士教育の質向上が求められているからにはほかなりませんが、特に、課題解決力の改善が指摘されており、下記の参考指針が提示されています²⁾。

1. 知識・理解（文化、社会、自然 等）
2. 汎用的技能（コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力 等）
3. 態度・志向性（自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任 等）
4. 総合的な学習経験と創造的思考力

実は、大学は専門的知識の教育だけで良いのだろうか？そうではなく、このような生活力、人間力を担保しなさいという教育機関へのお達しです。その背景には、卒業する20代の若者の中には、企業に就職してから、このような力の不足により苦勞する人が少なくないという社会事情があるからです。しかしながら、このお達しは大きな課題があると私は考えています。

そもそも、英国では1～4の能力は家庭や地域を中心にある程度、育まれると感じられます。豊富な休暇は家族での団らんや旅行に費やされ、BTCVのようなボランティア活動も大変盛んだからです。一方、日本はいかがでしょうか？小さい頃からTVやゲーム、塾とインプットばかりの生活となり、自ら行動し仲間と助け合い何かを達成する機会というのは、日々の生活の中で大変少ないのではないのでしょうか。もちろん欧米も少なからず同様の問題を抱えています。一方で余暇や市民活動は充実しているのです。専門家集団である日本の大学で、このような生活スキルを欧米

並みに近づけることは困難ではないでしょうか。

しかしながら、最近、私は、「いや、かえって、日本では良い考え方も」と思うようになりました。それは、私達が「ボランティア」という語より「奉仕」という語に小さい頃から慣れ親しんできた文化的素地があるからです。すなわち、「教育として奉仕活動を行う」ことを私達の社会は基本としてきた側面があると考えられるからです。課題は、本来の民主主義を担う市民を育むために、欧米並みの1～4を向上させる「教育としての奉仕活動プログラム」が求められているのかもしれない。これは、私からの提起です。

さて、九州大学芸術工学研究院（旧九州芸術工科大学）の環境設計学科では、十数年前より重松先生のリーダーシップで、農山村で1泊2日の新入生合宿研修を実施してきました。ほんの導入教育ではありますが、環境保全型農業の見学や、竹細工、タケノコ堀り、スギ・ヒノキ林の枝打ち・間伐などの作業は、学生の教育・研究・市民活動などへの動機付けという学習成果をもたらしています。このような教育としての奉仕活動を大学院レベルまで継続教育として、彼らの「Green path」としてステップアップできれば、きっと、すばらしい、1～4の向上が得られると想定されます。昨今、東京大学が新入生の9月入学の検討を開始しました。この目的は、単に留学時期の海外との統一のみではなく、この18～22歳の学生たちにボランティア等の時間を提供し、これらの力を欧米並みにつけることを期待しています。一方で、アルバイトに精を出すのではという懸念も



あるのです。最大の問題は、この学生たちを受け入れる事業力を有するNPOが国内に極めて少ない点にあると考えます。結果的に企業がこのようなサービスを広げる方向で良いのでしょうか。如何にNPOの強化を図ることができるかが求められており、大学を含め連携事業が必要です。

最後に、先ほど紹介した大学の研修は、「デザイン教育のススメ」という書籍として2012年3

月に出版を行いました。ご覧いただければ幸いです。

- 1) 学士課程教育の構築に向けて、文部科学省中央教育審議会，2008年12月24日。
- 2) 学士課程教育の構築に向けて（答申）概要，文部科学省中央教育審議会，2008年12月24日。
- 3) デザイン教育のススメ，朝廣和夫他，花書院，2012年。

■ ボランティア、ケガと弁当は自分持ち？（2）

小森 耕太（JCVN 理事・山村塾事務局長）

JCVN ではリスクアセスメントという手法を用いて、安全管理に役立っています。英国の環境保全ボランティア団体BTCVの手法をベースにしたもので、リーダー講座の中でも時間をかけてしっかりやる部分です。

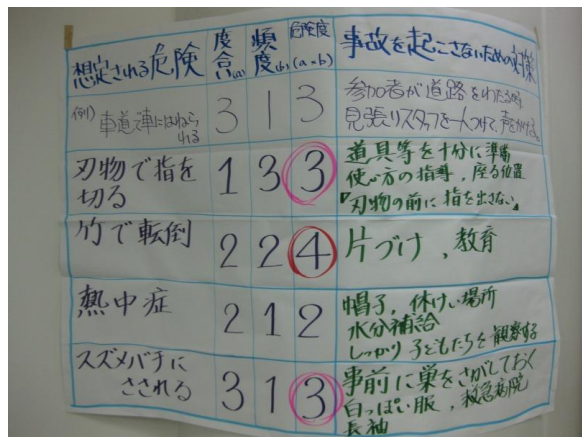
具体的には、

- ①実施計画や下見によって事前に<危険>を予測する。
- ②事故が起きたときの<度合い>、起きうる<頻度>を考える。
 ※度合い…3（死亡、重症）、2（中程度の怪我（病院へ行く））、1（軽い怪我（病院へ行かない））
 ※頻度…3（頻繁に起こりうる）、2（起こりうる）、1（めったに無いが、ひょっとしたら）
- ③危険への<対策>を検討する。
- ④事故が起きたときの<対応>を検討する。

という手順によって危険についての評価を行います。このときに大切なのは、全ての危険を洗い出すということ。リーダーや主催者は、「これが起きることはまずない」や「まあおそらく大丈夫だろう」などと都合よく考えてしまいがちです。リーダーや主催者にとっては当然のことでも、他のスタッフやボランティアの中には、そのことを

知らなかったり、気づいていない人もいると考えなくてはなりません。

どんなに準備をして計画を練っていたとしても、不測の事態や予期せぬ事故というものには起きうるものです。日頃から予測可能な危険について対策をイメージしていない人が、どうしてそういった緊急時に速やかに冷静な判断をとることができるのでしょうか。リスクアセスメントは、活動前のための準備作業であると共に安全能力を高めるためのトレーニングとしてとても有効です。皆さんも普段の活動の中や日常生活の中で試してみたいかがでしょうか？



■ 環境保全ボランティア活動と若者の自立支援（2）

塚本 竜也（JCVN 理事・特定非営利活動法人トチギ環境未来基地理事長）

若者自立支援団体を利用する若者達との環境保全活動が本当に成立するのか、よく質問をいただきます。私の答えは、「環境を整えればできる」です。

実際、NPO法人トチギ環境未来基地では平成23年度、林野庁の森林づくり国民運動の補助を受け、

『若者自立支援団体との連携による荒れた竹林の整備事業』を1年間かけて実施いたしました。

この事業では栃木県那須烏山市、茂木町の荒れた竹林で、栃木県内の若者自立支援団体7団体と、28回の活動を行い、延べ206人の若者が参加しました。作業内容としては、竹の伐採、枝払い、

チップ処理、作業現場の歩道整理、竹を活用した工作などを行いました。

地域の方々との交流会も行いました。作業のスピードは決して速くはありませんが、安全に丁寧に作業を進めることはできます。

本事業を実施する中で、若者達のやる気を引き出し、活動を行っていく上では、次のようなポイントが重要であるということ感じました。

☆本当に地域、社会が必要としていることに取り組む。☆それぞれの思いや、目標とすり合わせる。☆のこぎりの使い方など基礎を分かりやすく丁寧に教える。☆活動の中に、「考える」要素をいれる。☆ステップアップできる仕組みを持つ。☆参加者の体調や気持ちの動きに最新の注意を払う。☆問題解決も自分達で行う。☆活動イメージのブランディング。楽しい、爽やか、やりがいを伝える。☆ステキな大人に出会う機会をつくる。☆若者に期待する。

これらの内いくつかは、その場だけではできず、若者自立支援団体のスタッフとの協力を必要とします。しかし、ここまで活動をつくり込むことができれば若者達の力が発揮できると確信することができました。

また、この竹林整備活動は、若者達にも好評でした。竹林整備活動が若者に良い効果をもたらす

理由を整理し、次のようにまとめました。

●いつもと違う環境、気持ちの良い環境。●活動の成果が目に見える。●できる範囲に応じた、様々な作業がある(小分けにできる)。●体力がつく。●チームで作業できる。他世代で活動できる。●無理にしゃべらなくてもいい。コミュニケーションできる。●不思議なこと、思い通りにいかないことがいろいろある。

屋外での体を使った作業は、その機会と環境を上手に整えれば、若者達が自然に力を高めていくことができる素晴らしいフィールドであると年間を通じて感じる事ができました。



■人材は「育成」か「成育」か(2)

平 由以子 (JCVM 理事・特定非営利活動法人循環生活研究所事務局長)



「この歳で本当の百姓になったよ。それは真剣に、真剣に植えるから。」現在7か所の農園を切り盛りしている理事長は言います。植物は成長の過程で、ミネラルを土から吸収、人間と同じモノの多くを必要としています。私たちが日ごろの活動で伝えていることは、堆肥づくりをとおして、身の回りのもの(庭や台所の有機物)を植物が利用できる形の栄養にしているだけです。単純なことですが、まずは、考えるよりもやってみることが大事です。

ところで、オタクは1日にしてならずであります。中堅の私はスコップで堆肥を混ぜ出して20年、オタク団体として普及活動15年が経過。今日も昔と変わらずベランダや庭や山で自分のた

めに堆肥づくりをしています。オタクが人にわかりやすく、感じよく人に伝えられるってちょっと素敵ですね。コンポストの人材養成・支援講座では、それを目指しています。資格を取得することで、私たちのように何十年と取り組んで培った実践工学から生まれたスキルを、短時間に身につけることができるのです。先人に習うことで、コツをつかみ、堆肥づくりの奥の深さを知り、さらに楽しくなります。別のカリキュラムでは、伝えるコツや、リーダー論、コミュニケーションについて客観的に学びます。かくして、アドバイザーとして現場に出て、自分の地域の中で成長していきます。そこで物事の本質に目を向けられるようになる否か、実は、要領のよさよりも真剣さ、人に教えることに対する危機管理の意識を持っているかどうかにかかっているようです。

リーダーミーティング『パートナーシップで自然歩道を守る』開催報告

志賀壮史 (JCVN 理事・特定非営利活動法人グリーンシティ福岡理事)



もはや恒例になりつつある毎年2月11日の「リーダーミーティング」。昨年度は、福岡県との協働事業の一環として開催しましたが、今年度はJCVNの主催事業としての開催です。

今年は「道」、特に「九州自然歩道」をテーマに、山登りやトレッキングの愛好家にも参加者層を広げ、多くの方に「道」の保全ボランティア活動の意義や必要性を知っていただくことをねらいとしました。森林作業や里山保全だけでなく、観光にも日々の暮らしにも「道」の状態は直結します。地権者の高齢化で樹林が生い茂り観光道路が通りづらくなったり、住民による草刈りが行われなくなり生活道路が荒れてしまったり。「道」は多くの方が関わる公共空間だけに、どう維持していくかが今後も課題になってきそうです。

ちなみに九州自然歩道は、総延長約 3,000km で九州各県をつなぐネックレス状の長距離自然歩道 (ロングトレイル) です。九州各地の山々や国立・国定公園などの自然景観、史跡や集落・里山などの文化景観をめぐるコースとなっています。最近では、ロングトレイルを利用したトレッキングが注目を集めていますが、標識が壊れている、遊歩道が崩落しているなどメンテナンスの不備も課題となっています。今後、環境省や県・市町村に加え、利用者や地域住民、保全ボランティア等の連携・協働が必要な、まさにJCVNの活躍が求められているフィールドと考えています。

さて、ミーティング概要は以下の通りです。

リーダーミーティング

『パートナーシップで自然歩道を守る』

日時：2012年2月11日(土・祝) 13:30~17:00

会場：九州大学箱崎キャンパス 21世紀交流プラザ

内容：基調講演「歩く旅、九州自然歩道の可能性」

(鹿児島大学 岡野隆宏さん)

事例紹介1「イギリスのフットパス」

(九州大学 朝廣和夫さん)

事例紹介2「山村塾の癒しの小径づくり」

(山村塾 小森耕太さん)

全体ワークショップ(ワールドカフェによる)

重松理事長の開会挨拶でミーティングのスタート。

基調講演は鹿児島大学特任准教授の岡野隆宏さんです。環境省のレンジャーとして阿蘇の草原再生などに関わったご経験をお持ちで、現在は自然環境の保全と活用による地域づくりをご研究です。自然保護の父と呼ばれるジョン・ミュアによる「自然を遊ぶことで、自然を知り、理解し、愛着する。愛着することによって、人々のあいだに、その自然を守ろうとする意識が芽生える」という言葉を踏まえ、自然歩道が環境教育の場であることをお話しいただきました。また、ヤブ化や荒廃、標識の老朽化、歩道の崩壊など現状の課題がある一方で、自然歩道の現状把握の取り組みが進みつつあることをご紹介。最後は、九州自然歩道の再生に向けた「協働型管理」や「自然学校の活用」の可能性について話題は及びました。

続く事例紹介の一つ目はJCVN理事でもある九州大学の朝廣和夫さんより「イギリスのフッ





トパス」のお話。昔からその土地が公衆の通路として使われてきた場合、現在も通路として使用できる権利

のことを「通行権 (Right of way)」と呼ぶとのこと。これは 1949 年の「国立公園と田園アクセス法」で明文化されており、全ての自治体は、それらのパブリックフットパスを調べて、地図を発行するよう義務づけられています。その美しい田園風景やBTCVによる保全活動の様子などを美しいスライドで紹介していただきました。

二つ目の事例は同じく JCVN 理事で山村塾事務局長の小森耕太さんより「山村塾の癒しの小径づくり」の紹介。森林セラピー基地に認定されている八女市黒木町のグリーンピア八女にて、国際ワークキャンプのボランティアさんたちと一緒に間伐材や石を使った「癒しの小径」を作る様子が紹介されました。美しく、しっかりした道や階段、ベンチなどができあがっていく様子に、ボランティアでもここまでできるのかとの感想を持った方もありました。現在、この小径は来園者の散策路になるだけでなく、現地の「森の案内人」によって森林セラピープログラムのコースとしても活用されています。



事例紹介の後は、JCVN ならではの「おかしセッション」の時間。人気の「あおさぼう」をはじめ、篠栗の甘夏ようかんなど、おかしとお茶を楽しみながら交流の時間です。一番人気は特定非営利活動法人循環生活研究所の皆さん手作りの甘酒でした。ありがとうございました！

最後のワールドカフェのお題は「みんなで『みち』を守る、とは？」。各テーブルに分かれて自己紹介あり、おかしを食べながらの雑談あり、白熱した議論ありの時間でした。20分間ずつ、3回繰り返したおしゃべりで話題は様々に広がり

ました。感想を書いていたメモから抜粋します。

- ・山は母である。その道を歩み始めよう！
- ・「昔のくらし」と「今のくらし」、「昔のみち」と「今のみち」、「使う人」と「守る人」。
- ・守る人と使う人は、感動でつながる。
- ・自然に親しみ、慈しむ、大きな心を持ちたい。
- ・「働く+楽しみ」=関わることで「みち」に愛着をもてるように。
- ・もっと歩きたい！
- ・歩けば道はできる。里山の再生、農山村再生。
- ・私のような若い人間が、今後の里山を保全しなければ！
- ・道は未知。希望がある。後ろをふりかえる。
- ・50年先の日本を想像すると、社会インフラとして道の整備が重要になるよ。
- ・道は多様だ。時代とともにその概念も変わり広がる。道は歩かないと、使わないとその価値がわからない。いい道を後世に残そう。
- ・自然と共に道はあるのだ。土を踏む道である。

「道」という切り口からさまざまな可能性を感じたミーティングとなりました。今後、行政・地権者・地域住民・ボランティアなど、いろんな人たちとの協働の舞台として、また観光や地域づくりの舞台として、「道」を守り活かしていく事業を展開できたらと思います。

なお、このミーティング開催に先立ち、九州自然歩道の管理を行っている県や市町村を対象に、管理実態や自然歩道の状況に関するアンケートを行いました。8p~11pに結果を取りまとめましたのでご覧ください。



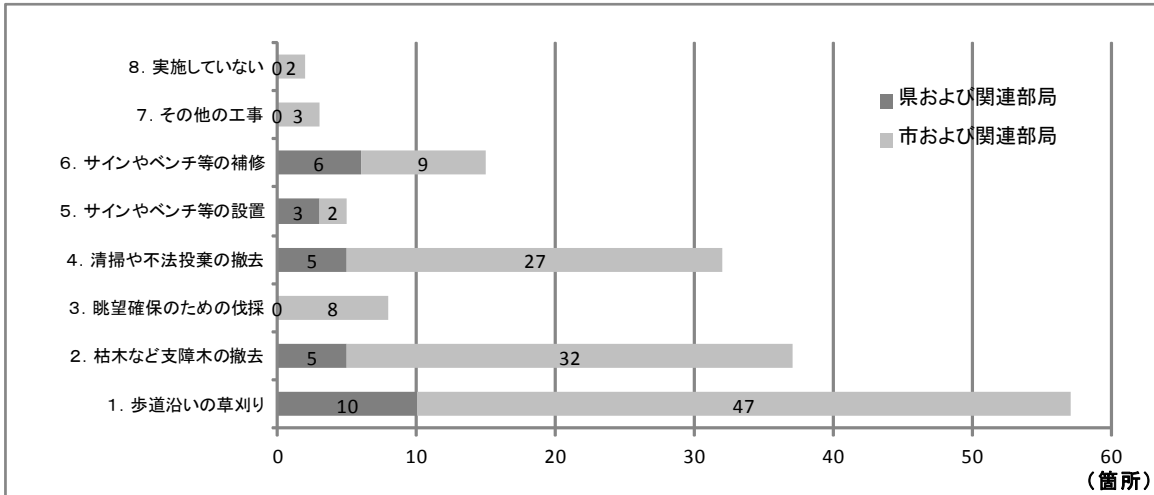
九州自然歩道の現状と『協働型管理』に関する意向アンケート 集計結果

【アンケート送付数】 計118通 (県および関連部局:14通、市および関連部局:104通)
 【アンケート返送数】 計80通 (県および関連部局:11通、市および関連部局:69通)
 【有効回答数】 計63通 (県および関連部局:11通、市および関連部局:52通)
 ※有効回答数とは、「九州自然歩道の管理を行っている」と回答した数を示す。

【問1】回答主体(自治体名、担当部署、連絡先等)のため、省略。

【問2】九州自然歩道の維持管理について、当てはまるものに○を付けてください。(複数回答可)

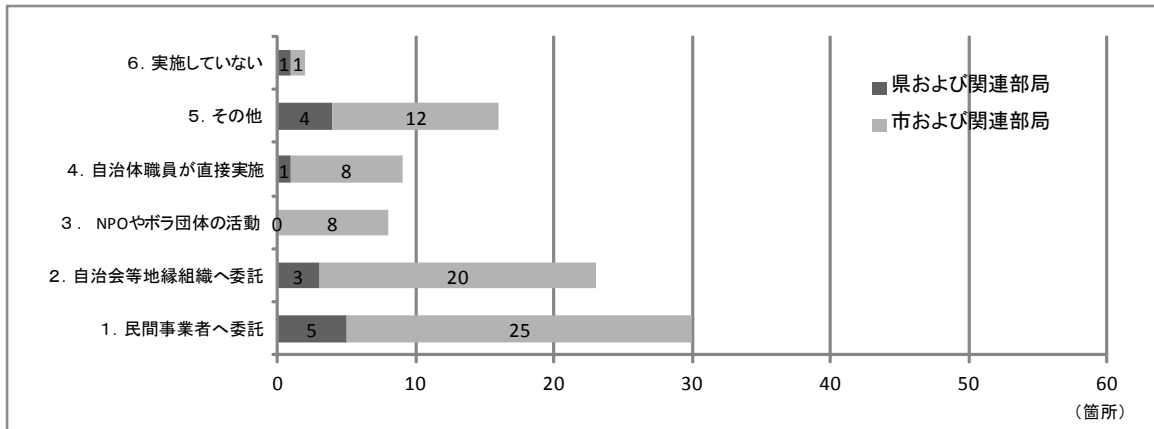
■直近3年間で実施した工事内容



(「その他の工事」記入内容、補足等)

- ・1~4は各市へ管理委託。 ・美化清掃、巡視等。 ・遊歩道の整備。 ・歩道整備、落石除去。
- ・老朽化した山頂付近展望台の撤去工事(市町村合併前に村が用地を借用し、設置したものを撤去)。
- ・5~6は県で実施。 ・木橋の修理。 ・倒れた標識を立てる等の簡易的なもの。

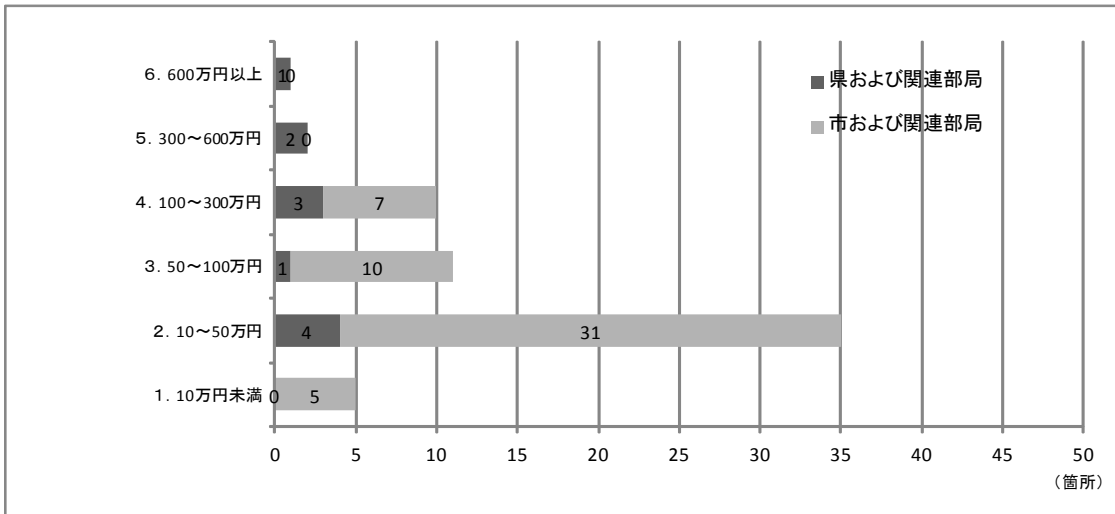
■維持管理工事の実施方法



(「その他」記入内容、補足等)

- ・民間事業者は標識やベンチ等の施設設置や補修を実施。他は市町村(維持管理契約)が実施。
- ・市町村(への委託)。 ・シルバー人材センター。(4) ・県が森林組合などに委託。
- ・近隣居住者で組織された委託先へ依頼。 ・山岳連盟等への委託。 ・個人に委託。
- ・任意団体へ依頼(作業員賃金および原材料費を負担)。 ・人夫雇い賃金支払い。
- ・県道のため、県で管理している。 ・自治体臨時職員が実施。 ・作業員の直接雇用。
- ・一部を観光協会へ委託。 ・年に一度のパトロール。

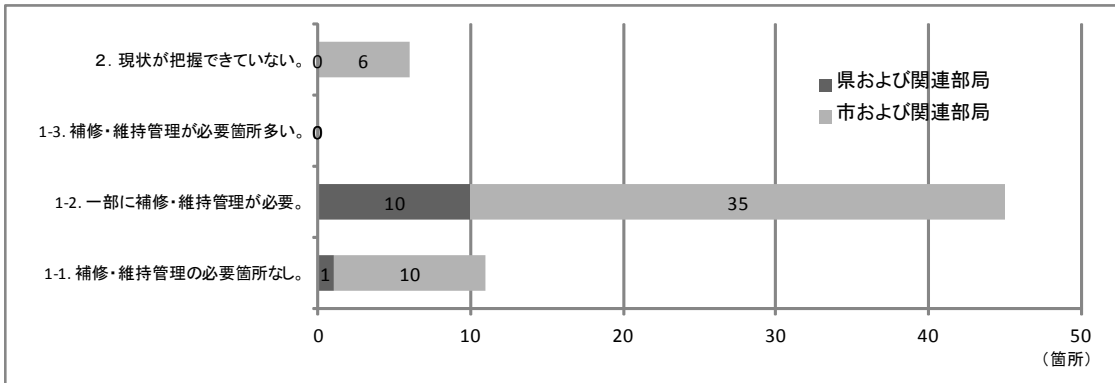
■維持管理の年間予算規模



(「その他用途」記入内容、補足等)

- ・市町村への交付金。市町権限委譲交付金を7市に交付。 ・便所清掃、便所設備保守点検。
- ・自然歩道外も含まれるため、按分。 ・自然歩道内にある公衆トイレの清掃管理費。
- ・関連として、名勝地の景観再生事業を実施。 ・清掃委託のみ。 ・消耗品。

【問3】管轄する範囲内の九州自然歩道の現状とその把握状況について、当てはまるものに○をつけてください。



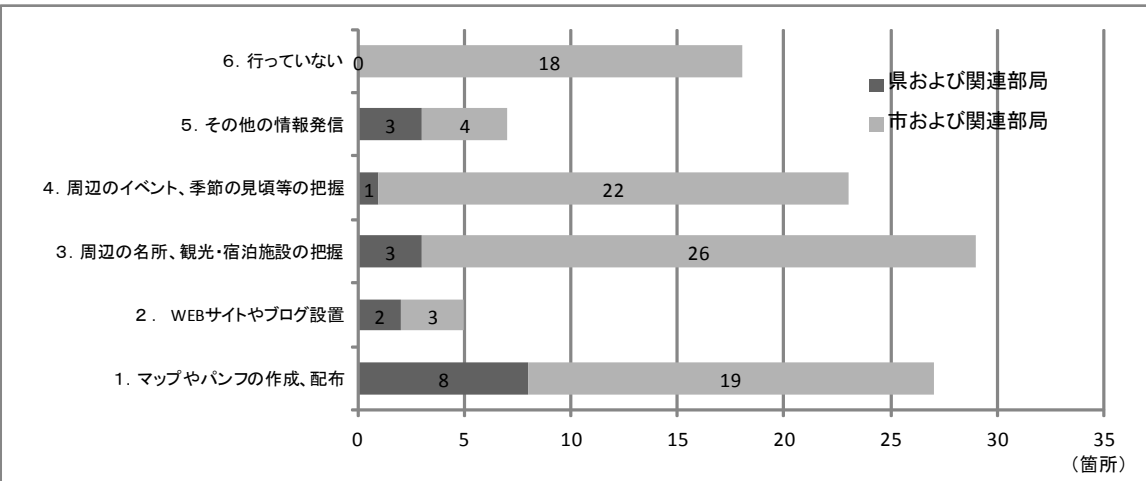
(補修や維持管理作業が必要な箇所や施設の課題についての概要、補足等)

- ・年々予算が縮減され、対応が困難になってきている。
- ・県内全路線をH22～H23年度で調査した結果、複線化している箇所や修繕が必要な箇所が確認できた。予算が限られているため、優先順位をつけて維持管理をする必要がある。
- ・県が借り受けている土地(歩道敷等)の外部に危険因子(転石や枯死木等)があった場合、県での対応は非常に困難。
- ・案内板の劣化により、文字が見えにくいものがある。
- ・山岳部における維持補修では、資材の搬入等に費用を要することから、小規模補修のその都度の対応が困難である。
- ・設置した看板の情報が古くなったり、老朽化してきており、対応が必要となっている。
- ・山頂展望台、野鳥観察小屋等、建物の老朽化および案内看板等の老朽化。
- ・歩道の補修。
- ・補修等を行うための財源がない。
- ・老朽化によって、山頂のあずま屋の屋根のコンクリートが剥離している。
- ・九州自然歩道であっても公有地であるとは限らないため、維持補修の必要があっても、本市が維持補修を行うことができるとは限らない等の問題がある。
- ・車が通らないところ、普段あまり利用者がいないところで補修が必要な場合があり、把握が困難。緊急性が低いところが多く、なかなか補修できない。

(前ページの続き)

- ・山間部にあるため、イノシシの被害がある。
- ・利用者が少ないため、予算計上が難しい。
- ・当市の九州自然歩道は、市道・県道・都市公園上に設定されており、それぞれの所管課において維持管理を行っている。そのため、自然歩道全体の維持管理については把握していない。
- ・山頂の案内板が倒れていたり、文字、絵がかすれており、読みづらい。
- ・県有のトイレがあり、その管理を町で委託を受けているが、老朽化が進んでおり、修繕等に経費がかさむ。
- ・災害後、路線変更等を行っているが、看板等の整備が整っていない部分もある。
- ・看板は老朽化で見づらい部分が多い。
- ・あずま屋、吊り橋、トイレ、手すり等の老朽化、枯木、支障木の伐採。
- ・案内板の欠落や歩道部分の土砂の流出など。
- ・管理者が国、県、市と異なるので、一体的な補修ができない。
- ・当市の九州自然歩道は、大半を市道として整備管理。純粋な歩道部分は約700mほどで特に修繕が必要な施設は設置していないことから、定期的な草刈りが主な管理作業である。特に課題はない。
- ・歩道の延長にある登山道において、階段や土砂留め等老朽化や土の流出などにより、撤去や補修が必要と思われる箇所がいくつかある。また、歩道の案内看板(矢印看板)も老朽化が進んでおり、分かりにくい箇所もあるので、補修等が必要。
- ・手すり、階段、案内板等の増設。一般道から登山口までのアクセス道(林道)の整備。
- ・イノシシ等に掘り起こされ、歩きづらい箇所がある。
- ・予算不足により十分な維持管理ができない。
- ・民間業者へ再委託で管理している。歩道標識類の保持や歩道等の軽易な補修は行えるが、国定公園内に係る歩道のため、工作物(ベンチ等)の新築・改築については、県への申請と許可が必要となる。
- ・毎年の草刈り作業費用がかかる。
- ・草が多く生え、歩道を塞いでしまう。
- ・倒木で歩行がスムーズにできない箇所、木柵の破損、土が谷に流れ落ち、歩道が狭くなっている箇所がある等。
- ・路肩の崩壊や、路側施設の一部損傷など。
- ・車道を伴う遊歩道については問題ないが、歩く人のためだけに遊歩道は、年2~3回の草刈りが必要である。

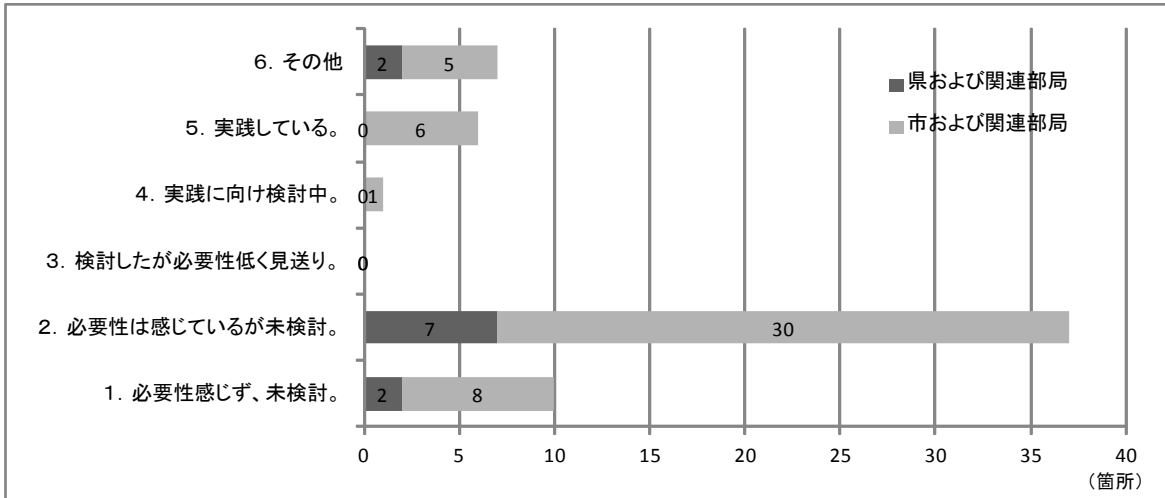
【問4】管轄する範囲内の九州自然歩道の利活用に関する情報整備や情報発信の現状について、当てはまるものに○をつけてください。



(「その他の方法」記入内容、補足等)

- ・案内標識を一部修正、問合せに応じて個別対応。 ・問合せがあれば、都度対応。
- ・県のHPに九州自然歩道のマップを掲載。 ・市や県のHPの中で、登山マップ、簡単な概要を掲示している。
- ・パンフレット、HPあり。庁舎内の情報発信コーナーにて配布。 ・配布のみ
- ・パンフレット等は県が作成したものを配布。 ・1、2を県で行っている。
- ・県で九州自然歩道マップが作成されている。 ・市HPにて、市の観光情報を掲載している。
- ・マップは一部区間のみ、利用拠点・施設を中心としたもの。
- ・不明点等は近隣町村共同の観光協会を紹介している。
- ・パンフレットは県作成のもの、HPも県のサイトを利用。

【問5】今後の九州自然歩道の管理・活用に関して、環境保全ボランティアやNPO等と連携した「協働型管理」をどのようにお考えですか？当てはまるものに○をつけてください。



(その他記入内容、補足等)

- ・各市へ維持管理契約により委託しているため、各市の意向を踏まえてからでないと「協働型管理」の実現に向けて検討することはできないと考えている。
- ・九州自然歩道の管理は、県から市町村に委託し、市町村を通して地元自治会に草刈り等の作業を委託して管理している。国立公園内にある歩道については、関係行政機関、民間団体等で構成される協議会において管理運営を検討し、対応している。
- ・事例等ありましたらご紹介ください。
- ・県が独自で行っているため把握していない。
- ・活動資金の助成等予算の確保は難しい。
- ・県の動向次第。
- ・県全体で考えるべきで、単独では考えていない。九州自然歩道の周知、知名度アップを行ったあとの話になるのではないかと。
- ・現在、地元自治会等による巡回、維持管理を行っており、住民の愛着による管理を行っているが、今後高齢化等により協力が得られない場合は、協働型管理の検討を行っていかねばならないと考える。
- ・将来的に必要であると思う。
- ・清掃協力金を収受し、九州自然歩道一帯の清掃を行っている任意団体に管理を依頼している。
- ・集落で歩道管理や公園管理等を行っている。清掃を年3~4回実施。
- ・現在、1任意団体が新規路線等の開拓を行っているため、いろいろな面で協力が出てくると思う。
- ・九州自然歩道の管理においては、車での移動がままならず、急峻な地形となっている箇所も多く、シルバー人材を活用した管理は困難である。現在、県から管理委託について当市が請負っているが、直接NPO団体が県と契約を結ぶような方法は考えられないものか。
- ・歩道として管理する延長が少ないこと、またこの歩道部は県の意観光課より市が管理運営を受託し業務を行っており、協働型管理については、財産の所管元の考え次第と思われる。
- ・任意団体から案内板設置、遊歩道整備等の協力を頂いており、それに伴う材料費等は市が負担している。
- ・国立公園に係る九州自然歩道であるため、「協働型管理」を行う場合には、県・市・NPO等との協議が必要になると思う。
- ・エコツアーを実施し、料金を徴収し、その費用で地元の人たちに管理作業をしていただく方法を取っている。
- ・現状としては、利用促進の発信等をしておらず、利用者が少ない。利用者が少なければ、整備に要する費用等の確保も難しいという現状である。
- ・施設管理者である県から維持管理の委託を受け、定められた内容の作業を実施している。創意工夫や自由度の高い管理を目指すためには、委託元の県と契約するのが適当と考える。

お知らせ

イベント情報やボランティア情報、事務局だよりほか

●書籍・CDの紹介

「よみがえれ里山・里地・里海」築地書館
重松 敏則+JCVN編 価格：¥3,780

これからの持続循環型社会、生物多様な環境を維持するのに欠かすことのできない里山、里地、里海、川をどのように保全し、利用するべきか。日本の里山、里地の変化を詳しく追ひ、今後の展望を切り拓く。JCVN理事らを中心に分担執筆した事例豊富な一冊です。



「里山讃歌～よみがえれ故郷・山・川・海～」

歌唱：山崎伸司
作詞・作曲：重松敏則
編曲：松尾直美
演奏：志村聖子
デザイン：原愛子
制作：JCVN



実際の風景や体験をもとに生まれたメロディと歌詞はまさに里山の世界。「里山讃歌」と「よみがえれ故郷・山・川・海」の2曲を歌入りとピアノ演奏のみのバージョンで収録。頒価¥300-

●事務局だより 浅田 真知子 (JCVN事務局)

3月24日、宗像市で活動を行うNPO法人文化財保存工学研究室の皆さんが主催する「土曜公開講座」にて行われた樹林地の保全活動に、グループリーダーとして重松理事長と会員2名、学生2名の計5名で活動に協力してきました。作業地は、もともと鹿児島にあった聖堂の再建地に隣接する樹林地。建物の傷みを抑えるため常緑の中低木を伐って風通しを良くしたい、という要望でした。樹林地は緩やかな斜面で見通しが良く、初心者でも楽に作業ができる樹木も多く生えており、作業フィールドとしてとても良い場所でした。作業は驚くほど早く進み、成果もはっきりと見え、

文化財保存工学研究室の皆さんには「とても満足の行く作業で楽しかった」と言っていました。

私は普段、自分が所属している団体以外の活動に参加する機会はほとんどありません。ましてや、他所でのリーダーとなればそのチャンスはゼロといってもいいと思います。今回、いつもと違うフィールド、いつもと違う参加者層、いつもと違うリーダーたちと活動できたことは、いつもの活動を客観的に思い返すきっかけになりました。経験の幅を広げたり、自分たちの活動の問題点に気づいたり、作業の楽しさに改めて気がついたり・・・もしかしたら他の団体の活動に参加することは、とてもよいリーダートレーニングになるのかもしれない。

JCVNとしてこのような活動を行うのは初めてのことでしたが、今後同様の機会があった時に、リーダートレーニングを受講した方やリーダー候補の方たちと一緒に活動できるような仕組みを作っていけるとよいですね。



CONSERVATION VOLUNTEERS 2

- 発行日：平成24年4月10日
- 発行頻度：年4回（1月、4月、7月、10月）
- 発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）
- 事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
tel/fax: 092-215-3966
e-mail: info@greencity-f.org